

私と超音波

中泉明彦

京都大学



〔略歴〕

中泉明彦

略歴

昭和53年東京大学理学部卒業、昭和55年東京大学大学院理学系研究科修士課程修了、昭和60年大阪大学医学部卒業、大阪大学付属病院研修医、愛染橋病院内科医員をへて、昭和62年から大阪府立成人病センターに勤務。消化器検診科部長、肝胆脾内科部長を歴任。平成21年4月京都大学大学院医学研究科教授に就任、現在に至る。大阪大学医学博士、東京大学理学修士

大阪大学第三内科研修医時代や愛染橋病院医員時代にも超音波検査を少し行っていたが、超音波との本格的な出会いは1987年に大阪府立成人病センター研究所第2部兼第三内科(消化器内科)に赴任してからである。北村次男先生が超音波検査室長であり、早朝から自ら超音波検査を患者さんにされながら研修医を指導されていた。不肖の弟子である私は京都から通勤していたせいもあり、この早朝実地教育の遅刻常習犯であった。また画像の鮮明さが現在の超音波画像と比べ、かなり劣っていたこともあり、画像の解説を受けても、なかなか納得できないことがあったのも事実である。

また1995年頃、厚生省(まだ厚生労働省ではなかった頃)の班会議に北村次男先生のお供で参加させて頂き、膵液細胞診により診断した膵上皮内癌の検討から、膵管拡張や膵嚢胞が膵癌の高危険群である可能性について報告したことも思い出深い。この報告の背景には以下のような経緯があった。1987年の秋にERCPの担当を竜田正晴先生から命じられ、ERCPを開始して間もなく、膵液細胞診で検出された膵嚢胞を伴う上皮内膵癌を経験した。本例は膵管狭窄・閉塞など膵癌を積極的に疑う所見は無かったので、このような症例を診断するには膵液細胞診しかないと考え、これ以降、ERCPを行う時には必ず膵液細胞診を併用することにした。すると、膵嚢胞や膵管拡張を伴う症例から1%程度の頻度で膵上皮内癌が検出されたのである。私は物理学修士となってから医学部に進んだが、「事実をゆがめて理論に従属させるのではなく、事実 に 則して素直に考え、理論より事実を優先することの重要性」を物理学で学んだことが臨床研究に生きている。

超音波内視鏡(EUS)は同じ頃、研究所第2部兼第三内科の先輩である一居誠先生がされていたが、一居先生の転勤に伴い私が、担当することになった。当時のEUSは、内視鏡の先端硬性部が長く、挿入性がわるく、挿入時、患者さんが強い苦痛を訴えることが、私にとっても大きなストレスであった。竜田先生の御配慮で1993年米国ミネソタ州のメイヨークリニックに内視鏡研修に行く機会を頂き、メイヨークリニックでは鎮静剤と鎮痛剤をかなり多量に投与して、苦痛のない内視鏡検査を行っていることを見聞した。帰国後、十分量の鎮静剤と鎮痛剤の投与で、EUSの苦痛軽減を図った。EUSの機種種の改良もあいまって、通常の上部内視鏡よりも楽だと言ってくれる患者さんも出現するようになった。この苦痛の軽減によりスクリーニング目的のEUSの可能性が開け、内視鏡学会で奥田茂先生がEUSに関して特別発言をされた時、「EUSは精査法としてのみならず、膵癌のスクリーニングとして有望である」との原稿を作成させて頂いたことも懐かしい。

竜田先生の監修で、内視鏡テクニックマニュアル、超音波内視鏡テクニックマニュアルなどの教科書を、執筆させて頂き、非常に勉強になった。

膵は後腹膜臓器で固定されていると考えられているが、やせた女性では、比較的容易に動く。私が担当していた膵癌と診断された患者さんをO部長が回診され、触診で腫瘍が容易に動くので、「この腫瘍は小腸由来である。」と言われた。患者さんが「私には膵臓と小腸の2つの腫瘍があるのか?」と不安にかられ、大騒ぎになり、「膵腫瘍だが動くのである」と理解してもらうのがなかなか困難だった。この膵臓といえども動くのであるという発見は、右側臥位に体位変換すると、膵が右方へ移動し膵尾部が描出されやすくなるという「体位変換による膵描出改善法」につながった。

1998年から11年間、田中幸子検診部長のもと膵癌検診に携わり、膵嚢胞や膵管拡張を伴う症例群では通常

型膵癌のリスクが高いことを実証できた。ただし、経過観察中の発癌例を早期診断することは、なかなか困難で、今後の課題である。

私は2009年4月から京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻にて次代の臨床検査技師や新しい臨床検査の開発に携わる研究者を育成する部門に着任した。京大病院の外来は9月から開始しているが、講義、実習といった教育に携わる時間が、主になっている。大阪府立成人病センターでは、毎日のように胆膵内視鏡検査に従事し、じっくり考え、議論する余裕がなかったのが実情であった。今後は、学生、病院スタッフ、同僚と議論しながら、新しい超音波検査の開発にも取り組みたい。幸い、当学科には超音波医学会理事の椎名毅教授がおられるので、今後、議論を重ねながら、新しい研究を目指したい。